

佳作

父さん

沢口
リリキ

十一月の海原から

海鳴りが

ひと気の絶えた浜辺に轟く

父さん

弔ったあなたは
いま何処にいる？

高く澄んだ空は

幼い頃に肩車をされて眺めた

深い静謐な青を湛えている

波間には陽光のきらめきが

水晶彫刻のように数知れず撒かれ

目映い反射のなかに

あなたの顔が あなたの姿が映る

沖を揺蕩う幻影の漁船から

浜辺に向かつて大きく手を振っている

余命三ヶ月との宣告を受け

それでも悠然と構え 病魔と闘った

八重岳のヒカンザクラが

静かに散りゆく季節に

いったい 僕に何が出来たのか

はたして 僕は何をしてあげられたのか

瞳の奥に宿した

生きようとすする意志の火を見て

穏やかに笑う 痩せこけた顔を見て

心を引き裂く

猛り狂う暴風のような混乱と滂沱の涙を

冗談や毒舌という非力な傘で

隠すしかなかった

あなたは穏やかで

ゴツゴツと突き出す骨を

黒ずんだ皮膚と呼べない皮を

優しく撫でていた

家族を養い

僕たち子供を成人に育てた

その肉体を労い 感謝するかのよう

そして死さえも友人として受け容れた

ウミンチュとして生涯を過ごし

死の神が訪れる前

海洋への散骨を望んだ

あなたのことだから

南の果ての龍宮で

豪快に笑い 民謡を唄い

海の姫や魚たちと

宴に興じているかも知れないね

岬まで行って クースを一升ほど流した
あまり飲み過ぎないように

いま この断崖から飛び込んだなら
酒を再び酌み交わすことが出来るかな

でも 僕の両肩を力強く掴み

口癖だった言葉で叱るのでしよう

「いのちは宝 いのちは贈りものなのだ」と

岩礁に烈しくぶつかり砕ける波は

絶え間なく まるで

あなたのいのちの脈動のように

勇ましかった

最後の最期まで 底知れぬほど剛健で
限りある生のなかで
あなたは勇ましかった

晩秋の午後に
独りで眺める海は

限りなく 生命力に漲り
限りなく 慈愛に溢れて
限りなく 哀しみに満ちている

父さん

陸が恋しくなったら

海亀の背に跨がり 渚を訪れ

決して上手いとはいえないサンシンを

時々 爪弾いて欲しい

困ることがないようにバチを

波打ち際の流木の下に埋めてある

奏でた音色は 海風が

あなたを愛したみんなの耳元に

必ず運んでくれるから